

刺激が詰まった北海道企画を終えて

現役(前部長) 三村 祐心(国際教養部都市デザイン)

入学時からなかなか活動ができない状況が続いた私にとって、OBの先輩方と北海道へ行けたことが、とても嬉しいことでした。知識豊富な先輩方と活動したことで、植物や昆虫、天文などさまざまな分野への関心を新たに抱いた旅となりました。

大雪高原の自然は壮大で、想像をはるかに超える美しさでした。その自然環境は、山荘付近のヒグマ情報センターで常に行われているレクチャーと同センターのスタッフの皆様が巡視や登山道整備によって維持されているのだろう、と感じました。足跡やフンから鹿や熊が近くに暮らしていることも実感しました。鼻の奥で広がる抹茶のような、ヒグマのフンのいい香りをまた嗅ぎに行きたいものです。

上川町郷土資料館では、まちの歴史、大雪高原山荘では山荘と沼めぐりコースのはじまりを知ることができる展示があって、大変興味深かったです。同資料館には、探検部の部室で見たことがある資料が置かれていたことには驚きました。

61年前の先輩方の活動では、生物班・地理班・商学班に分かれて学術調査をされており、綿密な計画・調査・記録をされていたことに敬服しました。また、当時の資料が残されていて、現在これらを活かすことができたことも非常に有り難く、私たちの代でも後世に活動記録を残していきたいと考えました。

今後の探検部では、ご一緒させていただいた先輩方の計画実行力を倣うこと、改めて実感した学術的関心を持つことのおもしろさを忘れずに活動していきたいと思います。

「大学沼」の今後の名称由来の動きにも現役部員として注目しています。

またいつか、先輩方と活動できる日を心待ちにしております。



目的意識を持って行動することの大切さ

現役3年 荒金琴美(国際教養部国際教養学科)

北海道、トレッキング、そしてOBとの交流など、自分にとって初の試みが多く、新鮮で知的好奇心を刺激される旅だった。

今でも大学沼までの道のりで足場が悪い箇所は多く、備品やテントを運びながら未開の地を進んだ61年前の先輩方の偉大さをあらためて想った。

また、資料館の展示により台風の影響で木々がなぎ倒されてしまった事実を知り、その復興および観光開発に向けた取り組みの一つとしての大雪山学術調査の意義を実感することができた。

資料館展示の猟銃やヒグマセンターの熊の剥製は威圧感があり、恐怖心を煽られたが、対照的に、登山道の熊の糞や食痕からは、自然の中で穏やかに暮らす熊の姿が想像できた。熊の痕跡が残る道を歩き、自分が彼らの生活圏に侵入している側だという認識を持ちながら、自然や野生動物と観光開拓のバランスを考えていく必要があると感じた。

今回、大学沼の命名由来である市大説を証明し、それを周知していきたいというOBの熱意や行動力に多大なエネルギーをもらった。その中で、目的を持って事前準備をすることで、1つの行動に意味を持たせ、達成感が得られるということを学んだ。

合同トレッキングに参加したOBが、61年前の先輩OBを尊重し、OB同士で絆を深める様子を見ていて、部活内の縦と横の繋がりを大切にし、横浜市大探検部(探査会)の伝統を意識しつつ、目的を持って企画に臨むことを今後の目標にしたいと思った。

また、OBの幾つになっても自身の興味関心に忠実で挑戦を重ねる姿がとても輝いていたので、自分も学生時代に熱中できる研究テーマを見つけられるよう行動し続けようと思う。

